



海辺のベラネツテ



烏丸琴子

凧いだ海原のただ中で、船の上のオグノスは身を乗り出し、じいっと目をこらしていた。

空は雲一つない晴天。だというのにこのアトランティカ海域は、昼の眩しい太陽でも照らし出せないほど深かった。こうして無言でのぞきこんでいると、巨大な群青が遠退いていくような、こちらへ向かって迫り出してくるような、ひどいめまいに襲われる。

オグノスは一度きつくまぶたを閉じると、ため息と共に遠い景色に目を向けた。

辺りには小島の陰もなく、ただ色の深いガラスのような海が水平線まで続くだけ。遙か東のけぶる彼方には、陸地が見えた。

百年も昔のこと、このアトランティカ海域には牙型に突き出した大陸と無数の島々があったという。しかしある日大陸は水没、周りの小島も飲み込まれるようにして姿を消して行った。その様子はあの陸地からも見えたという。

鼓膜を揺るがす地鳴りと共に、悲しみを押し殺すように震えながら、まるで神聖な儀式のように。高波が起こるでもなく、空は今日のように穏やかに晴れていて、向かいの大陸が沈む――。その姿はとても自然の仕業とは思えず、何者かの呪いであると伝わっていた。

何者か、この光の届かぬ暗闇の底に眠っているのだろうか。光も届かぬ、闇の中。

視線が再び水面へ吸い寄せられる。そうしていると、船の反対側から若い男たちの歓声が上がった。

「オグノスさあん、出ましたよ！」

ざぶざぶと、波間を割って何かを引き上げる音。それを背に、真黒に日焼けした若者が駆け寄ってくる。彼の瞳は日差し以上にきらきらと輝いて、シミのひとつも感じさせない。

「当たりですよ、ここら一帯、アトランティカの宮殿です！ 大量ですよ、床も柱も全部大理石なんですよ、あんな大きな塊はじめてですよ！」

興奮を隠しもせずに、若者はまくしたてた。大理石。アトランティカには最大の採掘坑があったとされているが、長年探検家を名乗ってきたオグノスにはさして珍しくもなかった。

「そうか。他に、何か見つかったか？」

「彫刻がいくつかと宝飾品ですね。後は人骨です。鑑定士に見せるために持ち帰ろうと思います。これが時の権力者なら、俺たちも歴史に残る探検家ですね！」

「結果も出とらんのに騒ぐな」

煩わしげにオグノスは顔をしかめた。目の前の青年の清々しい笑顔に、過ぎて行った同僚たちの姿が

重なっては消えていく。

日常とは違うなにかを求めて共に旅してきた仲間たち。志半ばで尽きた者、平穏な生活に戻って行った者、財宝を手に巨万の富と共に満足しその足を止めた者。そんな中、まだオグノス一人だけが納得できず、秘境とされる場所へ赴く日々を続けている。

「オグノスさんは落ち着きすぎなんですよ。ほら、来てください！」

「わかった、わかった」

期待した反応が得られなかったからか、若者はじれったそうにオグノスの後ろに回り背中を押してきた。

そんな無邪気な様子に、オグノスもついつい笑顔になる。近頃の彼は二十代前後の部下たちを見ると、息子がいたら、などと考えてしまうのだ。だが所詮自分のような根なし草には家族など無縁。そもそも女とも無縁だ。

「あんまりはしゃぎ過ぎるなよ。帰港する体力は残しとけ」

「わかってますよ！」

若い彼は自慢の胸板をドンとたたくと、白い歯をのぞかせて微笑んで見せた。

探検家オグノス。彼の冒険の始まりは少年の頃だった。

ある夜、近所の森の猟から帰った父親が、祖父からもらったお守り代わりにループを落としてきたと言って落ち込んでいた。縁に銀の細工が施され、小粒ながらもサファイアとオパールが散りばめられた、装飾品のようなループだった。

その風合いは時の流れを重ね深みがあり、少年オグノスは大人になったら父から譲り受けると約束を取り付けていた。

あれのことは諦めなさい、そう言われてベッドへ入ったが、彼の頭の中はあの古びた輝きを持つループでいっぱいだった。それは半世紀以上も前に祖父が国の狩猟大会で国王から賜ったものだという。しがない猟師の家に生まれついたオグノスにはあれ以上に美しいものを見たことがなく、そう簡単に諦められるはずがなかった。

両親が寝静まった深夜、オグノスは家を飛び出した。父親がいつも携えているリュックを担ぎ、家の裏手に立てかけてある松明を抱え、一直線に森へ向かって走って行った。

夜の森は恐ろしかった。ただでさえ月のない星空の下。ずらりと並んだ木の幹の隙間から、気が遠くなるほど濃く重なる草木の影がのぞいている。一筋の光もささず、蜘蛛の足のように不気味に覆いかぶさる枝葉の下は、夜よりもずっと暗かった。

オグノスは息を飲んだ。だが帰ろうとは思わなかった。この深い闇のどこかに、あの美しいループが眠っているのだ。あれは獣どもが持つにはふさわしくない。祖父の血を引く自分こそが持つべきもので、そして逆に、自分にはあのループに対して責任がある。オグノスは強くそう感じていた。

震える手でリュックからマッチを取り出し、松明に火を灯す。油の燃えるにおいが鼻につくが、その明るさとほのかな熱にオグノスの緊張は和らいだ。そうして、ゆっくりと森の中へ足を踏み入れる。土はゆるく、腐ったような異臭を放っていた。

一歩目から気が滅入るのを感じながら、さらに一歩、一歩と進んでいく。一呼吸ごとに左右を見回しながら、精一杯に耳を澄ませながら。しかし見えるのは炎に照らし出される草木の影、聞こえるのは松明の立てるちりちりという音と、姿の見えない獣の遠吠えくらいなものだった。

けもの道をでたらめに歩き回ってどれくらい経っただろうか。オグノスは炎に踊る草間に、一瞬鋭い光の反射を見つけた。

夜だったことが幸いした。無言で光に歩みより、視界をふさぐ雑草をかきわける。

しかしなかなか見当たらないので、松明を小さく振ってみた。するとまるでオグノスの信号に返信するように、チカチカと瞬きのような光が返ってくる。オグノスはその辺りへ屈み込んだ。

あった。競い合うようにしてびっしりと生えた太い茎の根本に、ルーペは挟まっていた。拾い上げてみると泥汚れ一つなく、何事もなかったような様子だった。縁のてっぺんの金具に通してあった革紐はなくなっている。猟の最中に切れたのだろう。そんなことを思いながら、オグノスはルーペをてのひらで包み、ゆっくりと傾けてみた。

暗黒の森の中、揺れる炎を受けて、流線形にかたどられた銀は濡れるように艶めいた。細かく表面をカットされた宝石たちは幻想の世界の蝶が羽ばたくようだった。普段以上の魅力をもって、ルーペはオグノスを虜にした。

不意に一陣の風が吹いた。耳を覆うごうという草葉の音と共に、松明が消える。

オグノスははっとした。その時にはすでに完全な闇に覆われていた。手元のルーペすら見えない。さっきまで彼を魅了していた輝きは消えている。慌ててルーペをかざしてみたが、ルーペが光ることはなかった。

この辺りに、光を放つものはもう何もなかったのだ。

オグノスは愕然として凍りついた。今になって耳につくのは、見えない虫の嘲笑うような声、獣の息遣いと潜めた足音。そしてあまりに大きすぎる、自分の鼓動。

火を。点けなければ。

思いつくと、オグノスは松明を脇に挟み、強張る体でリュックに手を伸ばした。その手を薄い刃物のようななにかがさめる。パシン、と音が鳴り、オグノスは甲高い息を漏らした。体が動かない。虫の音と、乾いたものがこすれあうカサコソという響き。闇の気配に変化はない。

草だ。オグノスは体を縮めたままふとそう思った。手の甲を、草に当てたのだ。ひりつく左手を引き寄せ舐めてみると、ぴりっとしみた。

ここはただの森だ。オグノスは言い聞かせる。父はいつも猟に出て、ウサギやらキツネのような小動物を持ち帰るばかりじゃないか。よくてもシカが関の山。ルーペを手にするまでだって、生き物一匹見つけやしなかった。視界が利かなくなったからといって、この闇の中に別のものが紛れ込むわけではないのだ。怯えることはない。

オグノスは浅く長い息をひとつつくと、今度は怪我をしないように慎重にリュックを前に持ってきた。

炎が辺りを照らしていたときには、雑草のことなどほとんど気にならなかった。だというのにどうだ、明りが消えた今、手に触れる葉の一枚一枚が、靴の下で折れる茎の一節ずつが、なんと存在感を放つことだろう。革製のリュックはカビ臭くにおい、その手触りは柔らかい温かささえ感じさせる。その中に突っ込んだ指先に当たるのは冷たく硬質な金属の水筒、鍵、この丸まった柔らかいものは地図を描いた羊皮紙だろうか――。それらの縁をなぞるようにして探っていくと、小さな四角い箱の角に指が触

れる。カチャ、と聞きなれた音。マッチの箱だった。ほっと息をつく。

オグノスは右手一本でマッチの箱を取り出し、スライド式の箱を半分だけ開けた。普段はそんなことはしない、両手で箱を開けてマッチを取り出し、片手に箱、片手にマッチの柄を持って擦らせる。だが今の彼の左手には大切な宝物が張り付いていた。ループをリュックに入れるという考えに至らなかった。オグノスはただループを無くさないことと、早く火をつけたいという思いでいっぱいだった。

震える右手で、箱を傾け上下に揺らす。かちゃかちゃと音をたて、中のマッチの柄が箱の縁に引っ掛かるのを期待した。その一本を唇に挟み火をつけようというのだ。もっと効率のいい方法などいくらでもあるはずなのに、今のオグノスには思いつかなかった。

彼の愚直な思いつきは成功した。目の利かない暗闇の中で、数本のマッチの尻が箱に引っかかった手ごたえ。オグノスは震える体を精一杯抑えつけながら、唇を尖らせる。自分の手元も見えない中、恐る恐る探るようにしていると、唇にマッチの箱が当たった。慎重にその輪郭をたどり、三本のマッチを啜ることができた。あとは目の粗い箱の側面につきたて、擦るだけ。オグノスは箱を閉じることも忘れて、慎重に箱を傾けた。中のマッチが数本、ぱらぱらと落ちていく。その音を聞きながらマッチを押し当てる。擦る。勢いが足りなかったのか、火はつかなかった。それどころか、啜っていたマッチの一本は柄からぽっきり折れてしまった。

ついていない。オグノスはもう一度試した。箱から、残っていたマッチが抜け落ちた。二度目の挑戦も煙のにおいが上がっただけで、失敗に終わった。

マッチなど子供だっけつけられる。オグノスは苛立ちながらももう一度試したが、結果は最悪だった。そもそも体勢に無理がある。オグノスは左利きで、拳句その手につかんだループと脇に挟んだ松明を落とさないよう意識しながら、不器用な右手と口でマッチをつけようとしているのだから。なんの拍子なのか、マッチの箱はオグノスの手から滑り落ちていった。あと思った瞬間には唇に挟んだマッチも落ちて、その存在は闇にのみこまれていく。

オグノスは慌ててかがみこんだ。尻や膝、頬、腕、ところ構わず全身に、周囲の雑草が触れてきた。ただの草だ。彼は存在を感じながらも手さぐりでマッチを探した。なのに、マッチ一本どころかマッチ箱さえも、その指先に触れることはなかった。

脇にしっかりと挟んでいた松明がころりと落ちた。周りの雑草が受け止める音。つうとわき腹を伝う汗の感触に、体中が一気に冷えていく。力いっぱい握った左手のループも汗にまみれて、今にもつると逃げ出してしまいそうだった。

これだけは渡すものかとオグノスはループを胸に抱きこんだ。両手を重ねるようにして、しっかりと握りなおす。それから目を閉じた。森を出るのは諦めよう。

オグノスは考えた。家を出たのは両親が寝静まってから。日付が変わるころだろう。それから闇雲に森をさまよい歩いたのが二時間ほどだとすると、夜明けまではやはりあと二時間程度だ。眠ってやり過ごせば短すぎる時間だ。幸い今は体も疲れている。安全な寝床さえ確保できれば、次に気づくころにはこの森にも木漏れ日が差しているに違いない。

そう考えて、オグノスは立ち上がった。それから辺りの雑草を踏みならしてみたものの、地面そのものが柔らかい感触がした。ぬかるんでいるのだろう。そんなところに寝転がるのは想像しただけで背筋が凍る。地面がだめなら木の上だ。オグノスはルーペをようやくリュックに滑り込ませ、両手をそっと暗闇の中へ差し出した。

何もない。いや、地面や草木が出す水気のせいか、まとわりつくような空気の存在を感じた。体をひねり後方も確認する。すると左手に細長いロープのようなものが当たった。ツタだ。ツタが垂れている。頭上に枝が張り出しているようだが、どの方向から伸びているのだろう？

いや。ここは森なのだ。木などどの方向へ行ったらあるに決まっている。森で木を探す――馬鹿げた自分の考えに、オグノスは笑いがこみあげてくるのがわかった。一体、どれだけあせって正気を失っていたのだろう。

すると急に気が楽になった。オグノスはすり足でまっすぐに進みだした。するとすぐに、靴底に堅いものがぶつかる。雑草ではない。木の根だ。それをたどれば、すぐに木にありつけた。大きな木だ。オグノスの腕では抱えきれないほどの幹。湿り気のあるでこぼこした皮からは、ほのかに甘い香りがする。その凹凸に指をかけて、オグノスは力任せに登って行った。途中爪が一本割れてしまったが、とりあえず体を任せられそうな太い枝までたどり着いた。それをまたぎリュックを胸に抱くと、あのルーペがちゃんと中にあるのか不安になった。

手を突っ込むと、硬質な円形のものが爪に触れた。それを引っ張り出して、両手で包みこむようにして胸に当てると、全身に安堵が広がる。思わず体が傾いたが、有難いことにちょうど肘をかけて頭をもたせかけることができる位置からも太い枝が出ていた。

そうしてみると、この木はまるで居心地の良い椅子のようだった。遊び疲れた子供のために、母親が用意しておいてくれるとっておきの場所のようだ。

彼はそれ以上なにも考えることなく眠りについて、村の大人たちが名前を呼ぶ声で目を覚ました。陽はとっくに昇っていて、重なり合う緑の隙間から温かい光がもれていた。

寝不足のせいか、オグノスは返事をする気力もなかった。ただぼんやりと足元に広がる森を見下ろして、これまでの森とは違っているように思った。

森は、彼にとって今まで人の背景であった。地面も草も木も、ひっくるめて森だった。木は根も枝も葉もひっくるめて木だった。けどそれは、たぶん間違っていた。

そんなことを考えている間にオグノスは大人たちに発見され、罵声と共に引きずり降ろされた。自分で降りられるとわめいたが、無視されてしまった。それから散々に怒られたが、父は自分がルーペを失くしたことはみんなに秘密にしていたようだった。ずるいと思ったが父の面目のため、オグノスは黙っていた。

それで気をよくしたのだろう、家に着いた父の一言目は「それはもうお前のもんだ」だった。

そんなことがあって、オグノスはすっかり調子に乗ってしまった。

胸に宝物のルーペをぶら下げ村の子供たちを引き連れて、冒険と称し人気の少ない場所を散策した。ただし夜の外出だけはしなかった。それで大人たちも容認していたのだが、土地の神様を祭る社を冒険した時にはさすがに叱られた。

しかし雨風にさらされ色の禿げたそのさみしい小屋で「神様」――黄金とルビーで飾り立てられた太陽のような鏡を見つけた興奮は、オグノスをさらに駆り立てた。

もっとだ、と彼は思った。もっと探したい、もっと美しいものを、自分は手に入れられるはずだと信じて疑わなかった。でもそれは、今ではない。少年オグノスは父の猟を手伝う傍ら読み書きを学び、休日には隣街の図書館へ通うようになった。自分を待っている宝物たちについて調べるために。

世の中は、たくさんの人が諦め忘れてきた宝物に満ちていた。伝説の勇者の朽ちた谷、忘れられた王家の墓、異種族に奪われた砦。火のないところに煙は立たない。とはいえそんな大物に手を出すようになったのは後のことで、始めは行方知れずになった貴族や冒険者の噂話をたどり、彼らの屍をあさるような日々だった。

そうして資金をためながら国中を渡り歩いた。その間にもたくさんの古い文献に目を通し、彼は獲物を品定めした。やっと報酬を出して冒険者に護衛を依頼できるほどになると、彼は異種族の出るような危険な場所に赴くようになった。ため込んだ調査力がものを言い、外れを引くことはほとんどなかった。そのうちに見よう見まねで剣を振り回すようになり、護衛も雇わなくなった。

逆に、その頃にはオグノスの名前を聞けばついていきたいという者が後を絶たなかった。果ては名乗らずとも、胸に光る銀細工のルーペだけで正体がばれてしまう始末だった。

他の宝物は、探検に必要な資金のためにすべて売り払っていた。誰かが「ほしい」と言えば最低限の額だけ受け取り惜しげもなく譲り渡した。金が十分足りているときなどは、ただで引き渡すこともあった。そんな義賊めいた行も手伝ったのだろう、彼の国での評価はうなぎ昇りだった。

別に善意でしていることではなかった。正直なところ、彼は宝物に飽きていた。なのに探したいという欲求だけが積み続け、息もできない。

彼は気道をふさぐものを振り払うようにして、旅を続けた。見慣れた人工の宝とは全く違ったなにか。それを求めて、オグノスはトカゲ人の住む白の砂漠に行った。揺らめく緑のオアシスは神秘的で淫靡であった。岩人の守る怒り山脈へ向かえば、昇る朝日は荘厳で、狂ったように猛る溶岩のうねりは、力の本当の姿を見せつけた。人の姿のどれほどちっぽけなものか。だが、それら自然でさえ、オグノスを満たすことはできなかった。

そこで目を向けたのが海だった。物言わぬ沈黙の支配する世界。そこでなら地上にはないなにかがあるような気がしていた。特に、アトランティカを呑んだといういわくつきの海域ならば。

なのにそこから引き揚げられたのは、岩の塊や金銀の財宝……人の手によって作られ、すでに散々に

想いをかけられてきた、古の人々の抜け殻でしかなかった。オグノスがほしいものはそんなものではないのに。

「オグノスさん、入りますよ」

宿の扉がノックされ、オグノスは我に返った。手元には分厚い手帳。若いころにびっしりと書き込んだメモは、もはやルーペがなければ読めなくなっている。机で眺めているうちにまどろんでいたらしい。

「ああ」

「すいませんね、夜分遅くに」

入ってきたのは、オグノスよりもやや若い、五十代半ばの男だった。陸地で覚えのある場所はすべて制覇して以来、海に出るようになったオグノスが最初に雇った航海士だ。歴史の研究家を自称し、質素で欲のないところが気に入っている。

「若い連中にはついていけませんでな、下の酒場じゃ落ち着きませんで」

苦笑いしながら氷の入ったグラスを二つ、机に置いた。確かに、一階からは若い男たちの馬鹿騒ぎが聞こえていた。

「飲みませんか」

「もらうよ」

答えを聞く前から、航海士は琥珀色の酒を注ぎ始めていた。

「オグノスさんは不思議な人だ」

二人分を注ぎ終わると、彼はベッドの縁に座った。オグノスも椅子を引き、彼に寄る。控え目な彼は声まで小さく、近頃は耳も利かなくなってきたオグノスには聞き取りづらかった。

「私は十五から航海士として海に出てるんですがね」

「知ってる」

「若いころはこれでも、海賊船なんてのに乗ってましてね。いやあ、戦いに負ける度殺されるもんだと腰抜かしたもんですよ。まあ航海士なんてもんは重宝がられるもんですから、こうして生きてますけどねえ」

「それも知ってる。賞金稼ぎどもにつかまったお前を、処刑場で買ったじゃないか。お前、もう酔ってるんだろう」

オグノスは呆れて、航海士の肩を小突いた。見れば、痩せて飛び出した頬骨の辺りは赤く染まって

いる。酔うと昔話に走る癖は何年経っても健在だった。

「しかしねえ、あなたほどついてる男は見たことがない。にらんだ場所は徹底的に探し、最後にやぜったいお宝がたんまりと出てくるなんて、他の男じゃないことです。まるでお宝どもと交信してるみたいだ」

「俺と海賊を一緒にするな」

酔っ払い相手に素面で話すのもばからしく、オグノスは酒を一気にあおった。航海士はすかさず注ぎ足す。

「俺はしっかり調査してからしか動かない。それだけだ」

「そう、そうやって一生懸命にやって手に入れた宝を、あなたって人は簡単に手放してしまう。それも、ものの価値もわからないような成金やお貴族さまたちにですよ、王都の博物館級の宝物を！」

「またその話か。お前が怒るから、最近はきちんと国に還元してるじゃないか」

調子づいて立ち上がる航海士を見上げて、オグノスはげんなりしてしまった。このやり取りを、この十年で一体何度繰り返しただろう。

「俺は宝物なんか見飽きちまったんだよ」

「じゃあなぜ探し続けるのですか？」

「わからん。探すこと自体が、好きだったんだろうな」

ため息交じりにそういうと、ふと航海士は口と閉ざした。真鍮のメガネごしの、落ちくぼんだ瞳がオグノスをじっと見下ろしている。老けたな、とオグノスは思った。それ以上に自分は年だ。彼もそのことに気付いているのだろう。

「だが俺は疲れた」

「そりゃ……」

航海士はちょっと口ごもると、笑顔を浮かべ、ベッドに腰を下ろした。

「あれだけの大仕事の後ですから。それに私ら、もう若くありませんからな」

「年のせいだけじゃない。俺は陸は十分探したんだ。海だって、もうたくさんだ」

「何をおっしゃる。たかだか十数年じゃないですか。私なんか――」

「アトランティカだぞ！」

遮るように、オグノスは声を荒げた。航海士は白くなった眉を悲しげに下げている。

「あのアトランティカ跡をさらったんだ。それでも俺は満足しない。他にどこ探せってんだ、え？ 陸続きに北上して先進大陸まで行くつもりか？ 氷の海を渡ってそのまま静かの森にでも行けって？ そ

れとも賢者オズに頼んで空でも探せってのかよ。俺は地質学者でもなきゃ歴史なんかでもないんだ。俺は疲れたんだよ！ 何探していいか、もうわからねえんだ、それでもまだ探したいんだ、なのに自分の手元すら満足に見えねえ！ 気がおかしくなっちゃう！」

オグノスのどなり声を聞きつけたのか、若い連中がどたばたと階段を駆け上がってくる音が聞こえる。それでも彼らはこちらに気づかれていないつもりらしく「静かにしろよ」などといって互いに馬鹿笑いしていた。

「.....では、調査はやめるということですか」

黙り込んだオグノスに、航海士は静かに言った。

「あなたとなら、もっとたくさんものを見つけられると思っていました。他の連中も同じでしょう」

「やめる必要ない」

急に神妙になった航海士を見ていると、オグノスは急に胸が重くなった。熱い鉄の固まりが喉につかえたようだった。

「この前、地図にいくつか印を付けたろう。さらえば何か出てくるはずだ」

「しかしあなたが行かなければ、誰が」

「お前だ」

言い募る長年の相棒の両肩を、ぐっと握る。肉体労働などほとんどしない彼の肩は骨張って華奢だった。

「船も乗組員も、お前が束ねるんだ」

そう言い放つ頃には、廊下までしんと静まり返っていた。

翌日に一人港町を離れるときも、オグノスは大した未練も感じなかった。ただ船と共に残していく部下たちの行く先が、満足なものになればいいと願うだけだった。

さあ、それはともかくオグノス自身はどこへ行こう。

ずるずると宿にいては結局船に戻ってしまいそうな気がしてなんとなく出てきたものの、行くあてがない。こんな経験は彼にははじめてのことだった。かつて、頭の中は常に未来のことでいっぱいだった。やらねばならぬことが山積みだった。しかしもうすっかり片づいてしまった。

オグノスは穏やかな天気の中、にぎわう街道をぼんやりと歩いていた。売り物らしい果物の籠を担いだ母子。物騒な武器を背負って情報を交換している冒険者たち。三輪の荷車に水がめを積んだ若者が、せっせとペダルを漕いでゆく。その横を、身なりの良い旅行者を乗せた馬車が悠然と追い越して行った。彼らはみな自分の向かう場所を知っているのだろう。そう思うと心細かった。

孤独？ 心と胸をよぎるその言葉に、オグノスは苦笑いした。暗い森の中を一人走ったあの夜だってそんな気持ちにはならなかった。怯える気持ちと隣り合わせの、張りつめた興奮が彼と共にあった。目の前の暗闇に宝物が眠っていると。

オグノスは、胸に下げたルーペを見下ろした。それがどンドン、どンドン重たくなってくる気がしてついに歩みを止める。街道の人々はのんびりと、彼を追い越していった。ため息が出る。重たいのは胸ではない、足だ。弱っているのだ。そう思った。

辺りを見回すと、ちょうど隅にベンチを発見し、彼は腰を下ろした。港街を出てからまだ一時間も経っていない。そうだ、船に乗ってからは自分の足で歩くことがほとんどなくなっていた。それどころか帆を上げるのも櫂を漕ぐのも若い連中にまかせっきりで、自分は船長室でふんぞり返っていただけだった。

もう今は、腰に下げた剣もただの重荷でしかない。オグノスはまたため息をついて腰ベルトの金具を外した。

肘から指先程度の長さしかない刀身は薄い幅があり、軽い切れ味は鋭かった。その身を包むのは鮮やかな赤や緑の刺繍で尾長鳥をあしらった皮の鞘。スパンコールと呼ばれる魚のうろこのようなパーツが編みこまれていて、三十年持っても未だにきらめいている。つばと柄は頑丈な鋼を打って作られていて、飾り気はないが多少のことでは傷一つつかなかった。握りやすさのため、柄には赤い飾り紐が何重にも巻かれ、巻き終わりはエメラルドの埋まった飾りで留められている。

この国には珍しい、砂漠の向こうの国で仕入れたものだった。ちょうど武器を探していたところ、風変わりな装いに惹かれて買い上げた。だがもう、オグノスには重すぎた。

じっと剣を眺めていると、水売りが近づいてきた。リュックに入れた水筒にはまだ口をつけていなかったが、オグノスは新しい水筒と、それにいっぱい水を頼んだ。景気のいいオグノスに、水売りは愛

想よく世間話などを振りながら水筒に水を詰めてくれた。お代に、オグノスは剣を渡した。金具のエメラルドだけでも水売りの一生分の売上以上の価値はある。水売りが怪訝そうな顔をしたので、オグノスはポケットから小銭袋を出し、正規の値段も支払ってすぐに立ち去った。居心地が悪かった。だが行くあてもない。

またしばらく行って、オグノスはすぐ足を止めた。剣を捨ててもまだ体が重くて仕方がなかった。水筒を二つも持っているせいだ。オグノスは再びベンチを見つけ出し、そこで一休みした。弁当売りから干し肉とサラダパンを買い、水を飲む。古い方の水筒を捨てようと思い先にそちらから飲んでいたのだが、ちょうど行商人らしい一家が彼の前を横切った。まだ幼い子供が、水がほしいと泣いている。

オグノスは近づいて行って、新しい水筒を渡した。幾分、体が軽くなった。

それから元気を取り戻ししばらく歩いたが、やはりすぐに疲れてしまう。オグノスはまたベンチに座った。

一体なにがこれほど重たいのだろう。リュックを下ろして、中身をのぞく。そこには地図と財布、ペンと分厚い手帳、換えの衣服が数枚乱暴に突っ込まれているだけだった。必要最低限だ。いや、そうだろうか。

オグノスは手帳を取り出した。もはや自分で読むのも一苦勞のこの手帳。世界の宝や秘密について調べては書き込み、紙が足りなくなったらはメモを挟みこんできたこの手帳。これもいらぬのではなにか。

しかしこればかりは簡単に手放すのは惜しかった。オグノスは適当なページを開け、胸に下げたループで覗きこんでみた。「アトランティカの根元の東、不老不死の魔女の住処有り」と、間違いだらけの下手な字で書かれている。

なんと、この街道の突き当たりではないか。しかしこれはずいぶん古い書き込みである。書きこんだ記憶のかけらも残っていない。どの文献を根拠に記したものか、参照も書かれていなかった。だからこそ、今まで無視するうちに忘れていたのだろう。不老不死の魔女の住処……。

じっと手元に見入っていると、不意に視線を感じ、オグノスは顔を上げた。そこには少年が立っていた。この辺りの村の子供なのだろう、特に荷物も持たずラフな格好で、大きな瞳をじいとオグノスに向けていた。いや、彼の手元を珍しそうに眺めている。オグノスは苦笑いした。

「このループは、だめだ」

しかし少年は諦めきれないらしく、無言でオグノスの膝辺りを眺めている。こいつの親はどこにいるのだろう、とオグノスは街道の左右に視線を走らせた。「失礼だからやめなさい」と一言言ってくれないだろうか。だがそれらしい大人の姿は見えなかった。気づけば夕暮れ時で、食事の支度でもしているのかもしれない。

「おい、坊主」

無言の圧力に耐え切れず、オグノスは少年に声をかけた。しかし彼は反応しない。ひょろりと手足が長く、まつ毛も長い。黒髪を短く刈り込んでいるため男だと思ったが、案外女の子かもしれない。そう思うと急に申し訳なく思った。

「なあ、聞いてくれないか。この辺で、魔女の噂を知らないか」

すると子供は、くりくりとした大きな瞳でオグノスを見た。それからこくこくと何度もうなずく。あまりの勢いに首がもげてしまいそうだとオグノスは思った。

「そうかそうか。ちょっと俺に教えてくれ」

言いながら、地図を取り出す。

「地図は読めるか」

また、子供は頷いた。口がきけないのだろうか。

「どの辺りに住んでるか、教えてくれ」

子供は、一瞬節くれだった長い指を地図の上で揺らし、それから焦らすように引っ込める。

「なんだよ」

不機嫌にオグノスが呻くが、子供は全く動じない。視線はオグノスの膝の上に注がれている。長年愛用してきたルーペの上に。

「……わかったよ！」

苛立たしくて、オグノスは声を上げた。ルーペなど。他にいくらだって手に入る。それより、いっそ眼鏡にってしまった方がいいだろう。

「やるよ。やりゃいんだろ。だから教えろ」

乱暴に言うと、子供は小躍りしてはにかんだ。そんなに喜ぶのなら悪い気もしない。どうせ子供のいないオグノスが持っていたとしても、墓暴きに盗まれる運命なのだ。そう考え、オグノスは大切な初めの宝物を諦めることにした。

とはいいえもう二度とこの美しい銀の陰影に触れることがないのかと思うと切ない気持ちになる。オグノスはため息を押し殺しながら、子供が指差した辺りに印をつけた。

「ありがとよ。ほら、持ってけ」

そう言って銀の鎖を首から外すと、子供はルーペなぞには目もくれず、オグノスの汚い手帳をかすめ取り、飛ぶようにして道を駆けていった。

「なんなんだ、ありゃ……」

どンドン遠のき夕日に黒い影となった子供の背中を眺めながら、オグノスは思わず吹き出し、大切な宝物を胸に戻した。体は驚くほど、軽くなった。

地図の印にたどりつくころには辺りは真っ暗だった。

街道から反れた海沿いの道は他に旅人もなく、かがり火もない。だがありがたいことに空には真っ白な満月が浮かび、冷たい海とそこに突き出す岬、そこに建つ白木の小屋を照らしていた。

近づいていくと、乾燥し、縦に裂け目のはいった扉があるのがわかった。魔女の住処としてはふさわしくないなと思った。小屋には煙突もないし、手入れされているらしく蜘蛛の巣ひとつない。怪しげな薬草やキノコどころか、花かごひとつない質素な軒先。夜の潮騒が切ないように鼻孔に響く。

デマを掴まされたのでは。オグノスはそう思い、扉をノックするかどうか悩んだ。こんな夜分に小汚い初老の男など入れてくれるはずもない。だが、この時間から引き返すほどの元気もない――。

オグノスは肩を落とした。探検家オグノス。その名を聞けば誰もが目を輝かせる。その男がこんな片田舎の小屋の前で、扉をたたかたたかないかで悩み立ちつくしている。情けなくてますます力が抜ける。

そうしていると、まるで意気地のない男を見かねたように、扉の方が勝手に開いた。とっさに言い訳を考えながらオグノスが目をやると、白い扉の陰から慚然とした女が顔を出した。

これは、魔女と呼ばれるだけはあるとオグノスは思った。

血色は悪く、くすんだくせ毛は伸び放題に絡まって、どんよりと中央へ向かってわだかまるような瞳は虚ろ、乾いた唇は、今はわずかに緩んでいる。灰色の着古したワンピースからは丈に合わない長過ぎる四肢が、中途半端に飛び出していた。

「あのう、夜分遅くに申し訳ないんだが」

女が何も言いださないなので、オグノスは慌てて言葉を探した。

「そのう、どうも道に迷ったようなんだ。道を教えてもらったんだが、どうやら俺が探していた場所じゃなかったらしい。引き返そうにもこんな時間で明かりもない。一晩泊めてもらえないかと悩んでいたんだが」

特におかしなことは言わなかった。オグノスは自分にほっとした。女も別に疑う様子も迷惑がる様子もなく、ただ無表情のまま頷いた。

「そうなさるといいわ」

ほとんど唇も動かさず、彼女はそう言って一步引き、中へ入るように促した。

「申し訳ない、明日にはすぐに発つ。宿泊費も払おう」

「お気になさらず。こちらは大したことはできないから」

そんなやり取りの後、室内に入って、オグノスは閉口した。部屋の中だというのに、外と変わらず暗かった。一人暮らしらしく手狭な居室には三方向に窓がついていて、それぞれから塗りつぶしたように暗い海と月明かりの浮かぶ空が見えている。室内に光源はない。部屋の中央に四角いテーブルがあるが、そこにはなにも乗っておらず、釜は冷たく冷え切ったままで、水がめには埃さえたまっていた。生活感のない、死んだような部屋。

「暗く、ないか……」

失礼でないかと気をもみながらも、オグノスは言わずにはいられなかった。すると女はちらりとオグノスを一瞥し、作りつけの棚からろうそくとマッチを持ってきた。

「お使いになって」

「悪いな」

そう言って薄暗い中テーブルにろうそくをのせ、マッチ箱を開けた。適当に一本取り出すと、柄が途中でぽっきり折れていた。仕方なく別の一本を取ると、火をつける。

部屋を覆う暗さの中、ろうそくの光は脆弱に女の青白い額を照らし出した。彼女は椅子に腰かけて、じっと窓の外の海を眺めている。なにか物思いにふけているのだろうか。向かいの椅子に座ったものの、オグノスはどうしていいものか考えた。

部屋の片隅には梯子がかけられていて、寝床はロフトにあると思われる。当然女主人はそこに眠るのだから、自分はこのテーブルで突っ伏して眠るか、あるいは床で寝ることになりそうだ。しかし、このような沈黙と暗闇だけが待つ場所だと知っていれば、その辺りで野宿したものを。あるいは、蠟燭とマッチだけをもらい今からでも外に出るべきか。考えていると、急に女が口を開いた。

「私、ベラネッテというのよ。あなたは？」

「オグノスだ」

ちょっとした誇りと共にそう名乗ると、女はようやく視線をよこした。唇が小さく「オグノス」とくり返す。それから少しだけ彼を見つめ、優しく目を細めた。

ひやっとした。いや違う、胸がずしりと痛んだ。初めて感じる痛みだった。男ばかりの生活続きで、女性とこうして二人で対面することなど初めてののような気がした。その上、このベラネッテの微笑みときたら、硬質な第一印象と違い穏やかで儂げでさえあった。

「オグノス。私たちどこかで出会ったことがあるわね」

「そうか。若いころはあちこち旅して回ったから、もしかするとそうかもしれない」

「ええ、きっとそうね」

「この間までは海に出ていたんだ。アトランティカ海域を調査したくてね」

「ふうん」

ベラネッテは片膝を椅子の縁にのせて抱え込むようにして、首を傾けた。なるほど彼女は、探検家オグノスの名前に聞き覚えはないようだ。そのことにわずかに落胆を感じて、オグノスは自分の気持ちが上ずっていることに気付いた。

他の誰に対しても、自分のことを知っていてほしいなどと思ったことはなかった。自分は常に見つける側で、誰かから見つけられたいなど考えたこともない。それが、年がいもなく女から羨望を得たいなどと。

ふと、オグノスはベラネッテを見つめた。彼女、年はいくつぐらいだろうか。整った顔立ちだが疲れた印象で、若くは見えない。三十の後半かそれ以上。だが自分の伴侶には若すぎる。娘というならちょうどいいだろうか。

しかし目の前の女は、どうしてかとても年下には思えなかった。暗がりに浸るようにして一人このさびれた小屋に暮らし、見知らぬ男の訪問にもおびえた様子なく、堂々とした様子だ。

不老不死の魔女の住処有り。

あのメモは一体、どこで書きこんだのだろう。不老不死の魔女などが実在するとしたら、こんな中年の男など部屋に入れたりするのだろうか。微笑みかけたりするのだろうか。

「海の底なんて、石くれと魚以外なにもいやしないわ。何を探していたの？」

「俺が探しているものを、探していたんだ。あんたの言うとおりに、結局なにも見つからず、俺は何を探していたのかわからず終いさ」

「探し方が悪かったのね、きっと」

ベラネッテはため息のように笑った。テーブルに置いた蝋燭が頼りなげに揺れる。どき、と心臓が凍りついた。火が消えてしまう。あの時のように。

「あの時の方がよっぽどあなた、うまく見つけたわ」

「おい、火が……」

彼女は急に蝋燭の上に身を乗り出した。長い髪が炎に触れてしまう。慌てて、オグノスはかぼうように炎の上に手をかざした。その勢いで火はふうと消えた。姿を現した暗闇の中で、ベラネッテの指先が胸のルーペに触れた気がした。

「消えてしまったな。今、点ける」

言いながら、オグノスはテーブルの表面に手を滑らせた。こつんと、小さな四角い箱の角に指が触れる。カチャ、と聞きなれた音。マッチの箱だった。ほっと息をつく。そして息を呑んだ。

おかしい。この部屋、こんなに暗かっただろうか？ 三方向に窓があり、月光が仄明るく忍び込んでいたはずだ。厚い雲が覆ってしまったのだろうか。オグノスは顔を上げ、辺りを見回す。窓など見えなかった。辺りには月も星も見えない。まるで部屋ごと漆黒の海に吞まれてしまったかのような暗黒が漂っている。

一片の灯火さえ存在しない、この部屋はまるで神が光を作る以前の世界のようなようだった。

ばかばかしい。オグノスは慌てて否定した。子供のように闇に怯えて取り乱すなど。それに比べてベラネッテときたら……、声も上げない。

「ベラネッテ」

呼んでも返事はなかった。とりあえずマッチを手に取り箱を開ける。太くなってしまったオグノスの指では器用に中身が取り出せず、仕方なくオグノスは箱を傾け上下に揺らす。かちゃかちゃと音をたて、中のマッチの柄が箱の縁に引っ掛かった。その音。オグノスは愕然とした。「私たちどこかで出会ったことがあるわね」鳴り響く鐘の木霊のように、彼女の声が頭蓋の闇の中へ溶けていく。

「ベラネッテ」

もう一度呼びながら、オグノスはテーブルの縁をなぞって歩いた。靴底に触れる床板がきいきいと鳴く。向かいの椅子までたどり着いたが、そこに彼女はいなかった。

「おい、からかうなよ。暗いのは苦手なんだ」

「怖いのかしら」

どこからか返事は返ってきた。ほっとして体の力が抜ける。なんだ。なんてことはない、ただ火が消えただけだ。狼狽する自分をからかおうと、ベラネッテはロフトにでも忍び足で登ったのだろう。

情けない。オグノスはベラネッテが座っていた椅子に腰を下ろした。

「そりゃ急にこれだけ暗くなれば、怖くもなる。月はどうしたんだろうな。星も見えない」

「見えないから？ 見えることにどれだけの意味があるの。見えないだけ、なにも消えちゃいないし、増えてもない。なぜ怖れるの」

すると急に、胸を押された。慌てて手を出すと、そこにはほっそりと長い手首があった。ベラネッテの指先が、ルーペを押している。暗闇の中の宝。オグノスはそっと両手で触れた。

「ここにあるわ。あなたの宝物。触って」

「ああ」

「重みを感じるでしょう。首に食い込む鎖の。冷たさを感じるでしょう、銀の。香りを感じるでしょう。時間の」

「ああ。感じる」

「目を閉じてる？」

「閉じるよ」

すると、ルーペの縁に描かれた柔らかな流線形が、青々と茂るツタの模様であることが分かった。若葉を揺らす風であることが分かった。散りばめられた石はその間を舞う蝶、それに燕の瞳だ。これは雨上がりの庭園なのだ。温かな春の世界。懐かしい記憶がよみがえる。サファイアとオパールの羽ばたき、幻想のイメージが、暗闇の中でほころぶ花のように永遠に広がった。

「――あら」

ベラネッテの声が、引き潮のように遠のいていく。

「眠ったの、オグノス」

そういうと、ベラネッテはまるで母親のように優しく、闇色の毛布をかけた。

【おしまい】